「遠隔支援についてのアンケート」分析結果第一次報告書

2020年6月8日

一般財団法人 発達支援研究所

所長 山本登志哉

主席研究員 渡辺忠温

東京都千代田区神田駿河台 2-11-1 駿河台サンライズビル B1 Tel : 03-5244-5170

目　　次

はじめに 2
【Ⅰ】 結果の概観 3
① お子さんの年齢 3
② 遠隔支援利用経験 3
③ 利用有(302 名)の利用回数 3
④ 障がい種別（重複回答） 4
⑤ 子どもの性別 4
⑥ 居住地域 4
【Ⅱ】 利用経験と項目評価 5
① 遠隔支援でのお子さんの様子はどうだったか？ 5
② 遠隔支援について保護者の方自身はどう思われたか？ 5
③ 利用も体験もされていない理由 6
④ 遠隔支援の存在を知らなかった方の印象 7
⑤ 遠隔支援経験の有無で、各項目の評価について何が変わるか 7
【Ⅲ】 遠隔支援の必要性をどう思うか？ 9
【Ⅳ】子どもの年齢による遠隔支援への認識の差 11
【Ⅴ】障がいや困難の傾向による違い 13
① 自閉症との関係 13
② ADHD との関係 13
③ LD との関係 14
④ 知的障がいとの関係 14
⑤ 情緒障がいとの関係 14
⑥ 言葉の遅れとの関係 15
⑦ 社会性発達の遅れとの関係 16
⑧ その他 16
⑨ 全体として 16
【Ⅵ】遠隔支援説明動画の視聴の有無との関係 17
【Ⅶ】自由記述から 19
【Ⅷ】まとめ 23
資料「質問項目」 25

はじめに

この報告書で報告される調査は、（一財）発達支援研究所が（株）クラ・ゼミからの依頼を受け、主として同社の運営する児童発達支援および放課後等デイサービス事業所こどもサポート教室に通う保護者を対象に、各教室の協力の下で実施したものです。

調査の目的は以下のようなものです。

① 新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、その代替手段として導入が図られた遠隔支援について、利用者は現時点でどのように受け止めているかを明らかにする。

② 新型コロナウイルス感染が終息したのち、遠隔支援を行うことの必要性について、利用者がどのように考えているかを明らかにする。

③ 遠隔支援の実施についての利用者の意識が、お子さんの年齢や障がい種別などの諸条件によってどのような違いがみられるかを明らかにし、実施に際する配慮の必要性について検討する。

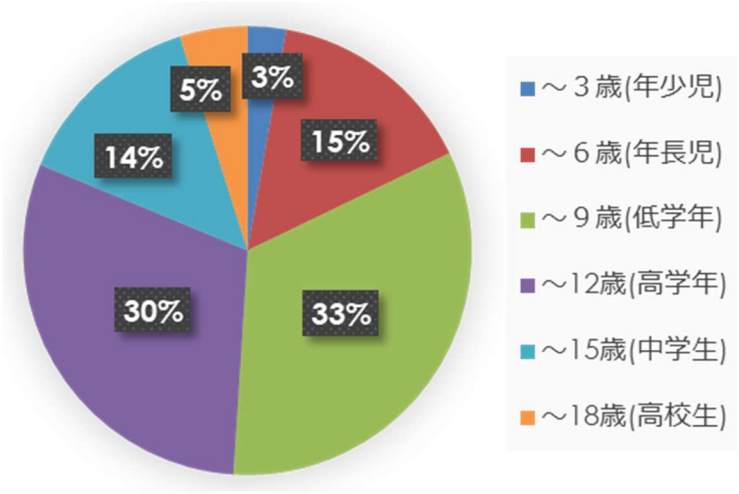
実施要項

実施日：2020 年5月 18 日～26日
実施方法： Google form による回答
匿名性： 記載を求める回答者の属性には、個人を特定する情報は一切含まれない
回答依頼方法： ①こどもサポート教室に通う利用者に案内 ②はつけんラボ HP での募集
回答者数：1333名
回答率：17.3%（全利用者の中で回答された利用者の比率。HP 経由3名を除く）

今回の第一次報告書では、これらによって得られたデータの全体について、記述統計レベルの整理と分析を行います。こののち、第二次の分析では、回答者の複数の属性の組み合わせを用いつつ、各解答傾向を規定する要因を推定するなど、一歩踏み込んだ分析を行う予定です。

【Ⅰ】結果の概観

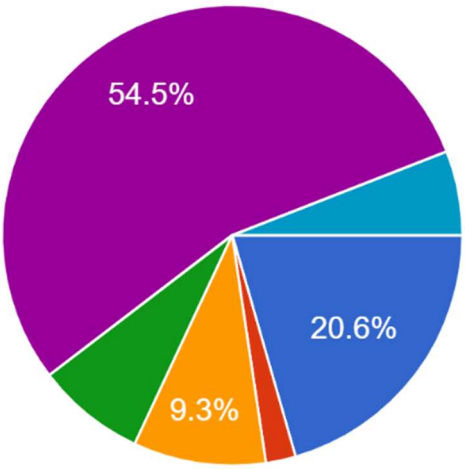
① お子さんの年齢



年少児	1歳	0	高学年	小4	163
	2歳	12		小5	138
	3歳	25		小6	102
	計	37		計	403
年長児	4歳	46	中学生	中1	85
	5歳	115		中2	55
	6歳	40		中3	45
	計	201		計	185
低学年	小1	143	高校生	高1	39
	小2	156		高2	17
	小3	143		高3	18
	計	442		計	74

（数値の単位は「人」。以下同じ）

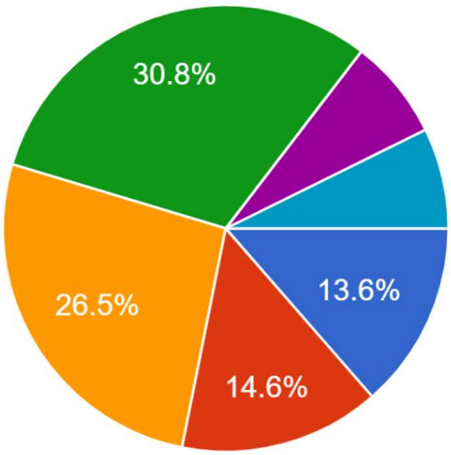
② 遠隔支援利用経験



- 今現在正式な支援として利用している
- 以前正式な支援として利用したことがある
- お試しで教室（事業所）と家庭をつないで体験してみたことがある
- お試しで教室（事業所）内で体験してみたことがある
- 利用もお試し体験もしていない
- 遠隔支援について知らなかった

利用有 （現在利用＋過去に利用）	302
体験有 （教室内でお試し体験＋家庭でお試し体験）	226
経験無 （利用も体験も経験無＋知らなかった）	805

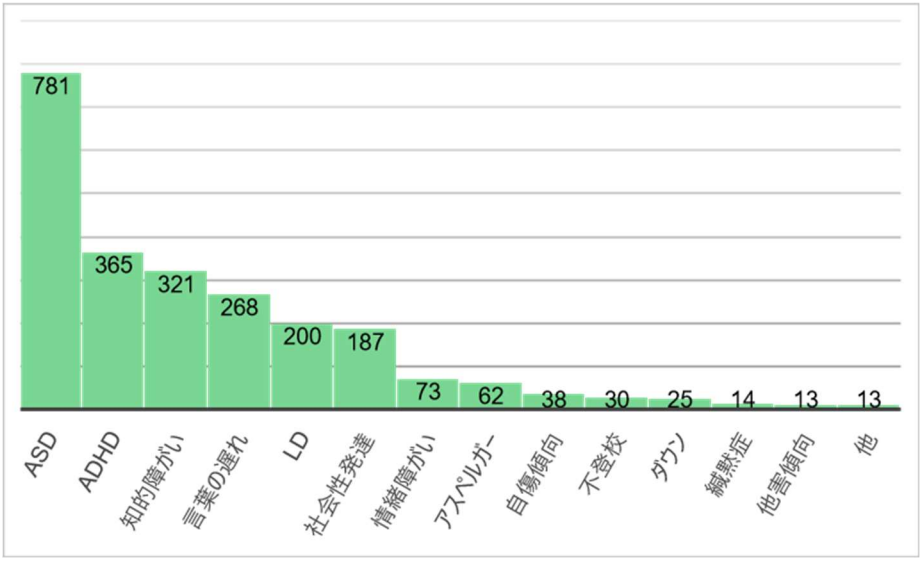
③ 利用有(302名)の利用回数



- 1回
- 2回
- 3回
- 4~6回
- 7~9回
- 10回以上

1回	41
2回	44
3回	80
4-6回	93
7-9回	22
10回≦	22
計	302

④ 障がい種別（重複回答）



障がい種別	率(%)
自閉	58.6
注意	27.4
LD	15.0
ASP	4.7
ダウン	1.9
知的	24.1
情緒	5.5
言語	20.1
社会	14.0
不登校	2.3
自傷	2.9
他害	1.0
緘黙	1.1
他	1.0

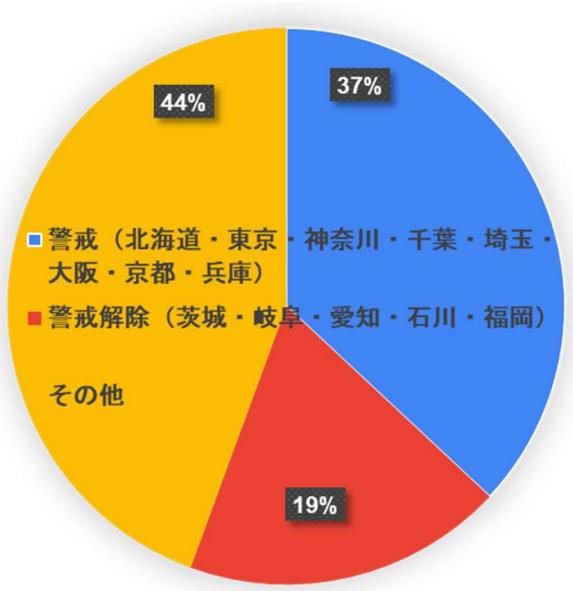
⑤ 子どもの性別

	率(%)
男	73.7
女	26.3

⑥ 居住地域

警戒（北海道・東京・神奈川・千葉・埼玉・大阪・京都・兵庫）	493
警戒解除（茨城・岐阜・愛知・石川・福岡）	248
その他	592

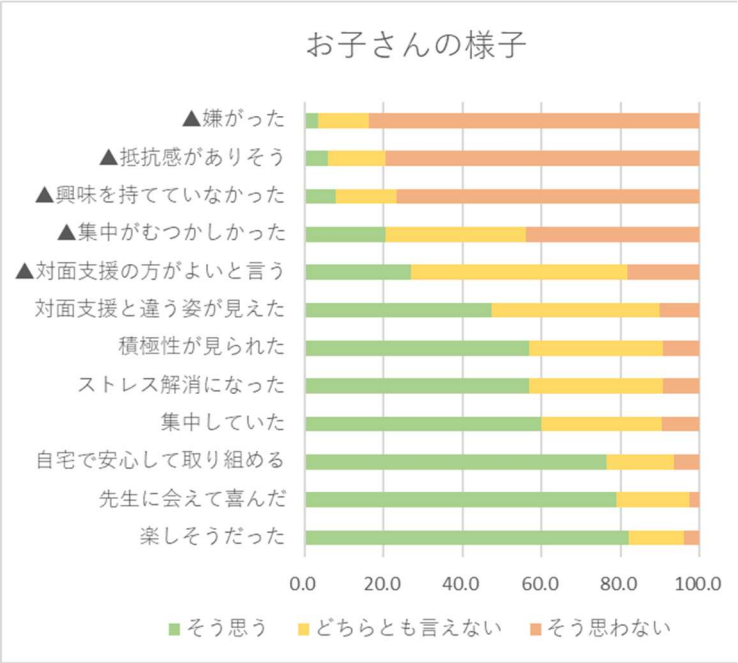
（人）



【Ⅱ】 利用経験と項目評価

① 遠隔支援でのお子さんの様子はどうだったか？

今現在遠隔支援を利用していたり、利用した経験がある方について、その時のお子さんの様子をお尋ねしてみました。



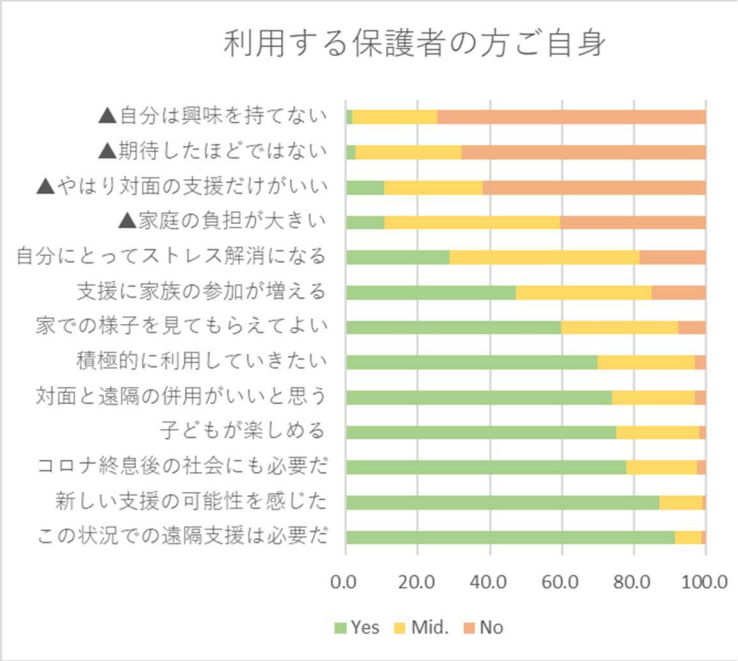
	Yes	Mid.	No
楽しそうだった	82.1	13.9	4.0
先生に会えて喜んだ	78.8	18.5	2.6
自宅で安心して取り組める	76.5	16.9	6.6
集中していた	59.9	30.5	9.6
ストレス解消になった	57.0	33.8	9.3
積極性が見られた	57.0	33.8	9.3
対面支援と違う姿が見えた	47.4	42.4	10.3
▲対面支援の方がよいと言	26.8	55.0	18.2
▲集中がむつかしかった	20.5	35.4	44.0
▲興味を持てていなかった	7.9	15.2	76.8
▲抵抗感がありそう	6.0	14.6	79.5
▲嫌がった	3.3	12.9	83.8

(%)

グラフの項目で▲がついているのは否定的と思われる内容のものです。これを見ると、否定的な項目についてはすべて「そう思う」は少ないことがわかります。逆に肯定的な項目については、ほぼすべてが半数以上（47.4%～82.1%）の高い割合で「そう思う」が選ばれています。

このように、実際に利用しているか、体験のある方は、その時の子どもの様子について、基本的には肯定的にとらえられている様子が確認できます。

② 遠隔支援について保護者の方自身はどう思われたか？



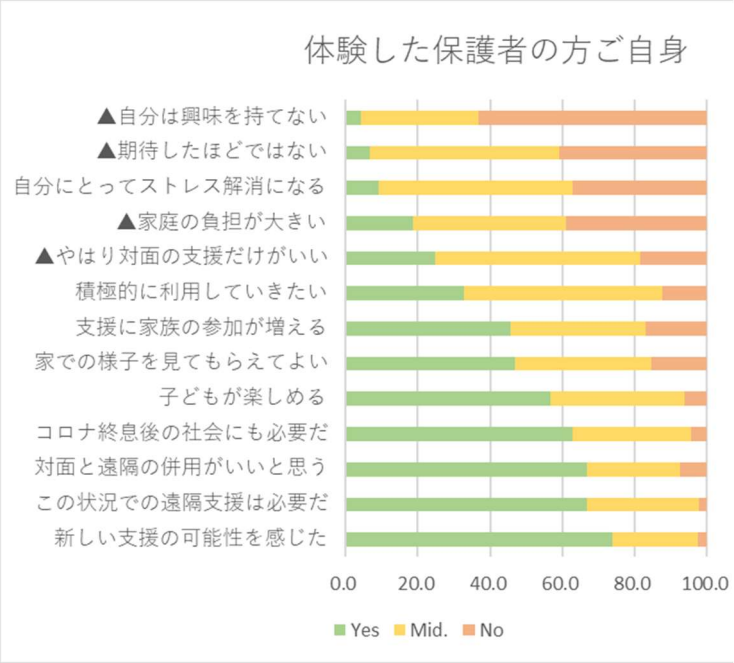
	Yes	Mid.	No
この状況での遠隔支援は必	91.4	7.3	1.3
新しい支援の可能性を感じ	87.1	11.9	1.0
コロナ終息後の社会にも必	77.8	19.5	2.6
子どもが楽しめる	75.2	22.8	2.0
対面と遠隔の併用がいいと	73.8	22.8	3.3
積極的に利用していきたい	69.9	26.8	3.3
家での様子を見てもらえて	59.6	32.5	7.9
支援に家族の参加が増える	47.0	37.7	15.2
自分にとってストレス解消	28.8	52.6	18.5
▲家庭の負担が大きい	10.6	48.7	40.7
▲やはり対面の支援だけが	10.6	27.5	61.9
▲期待したほどではない	2.6	29.5	67.9
▲自分は興味を持てない	1.7	23.8	74.5

(%)

保護者の方自身の評価は、子どもの様子についての評価よりさらに肯定的とも言えそうです。唯一「自分にとってストレス解消になる」といった項目については「どちらとも言えない」が過半数を占めていて、そう思うと答えられる方は 28.8%にとどまっていますが、それ以外の肯定的な項目については 47.0~91.4%までとなっています。

また遠隔支援について「コロナ終息後の社会にも必要」(77.8%)、「新しい支援の可能性を感じた」(87.1%)と、単に今この状況で代替手段として必要だという認識を超えて、遠隔支援という新たな療育支援の方法そのものをかなり積極的に感じられていることがわかります。

次に同じことを、まだ利用はしていないが、体験はしたことがある、という方について見てみます。



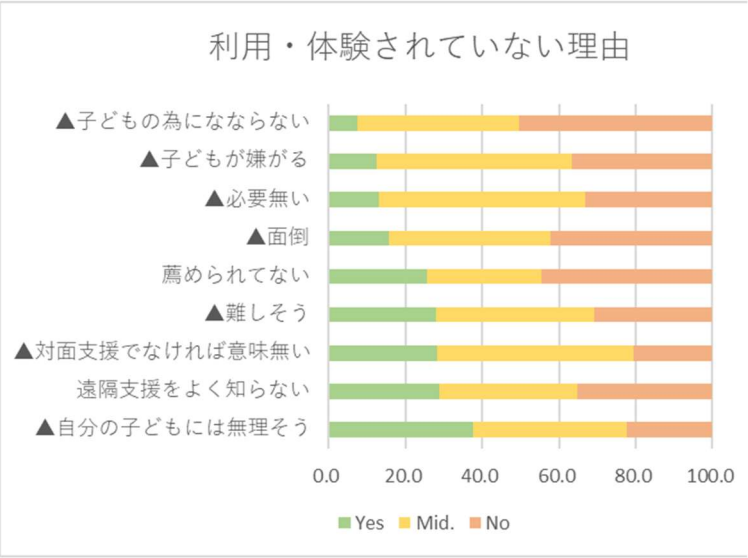
	Yes	Mid.	No
新しい支援の可能性を感じ	73.9	23.5	2.7
この状況での遠隔支援は必	66.8	31.0	2.2
対面と遠隔の併用がいいと	66.8	25.7	7.5
コロナ終息後の社会にも必	62.8	32.7	4.4
子どもが楽しめる	56.6	37.2	6.2
家での様子を見てもらえて	46.9	37.6	15.5
支援に家族の参加が増える	45.6	37.6	16.8
積極的に利用していきたい	32.7	54.9	12.4
▲やはり対面の支援だけか	24.8	56.6	18.6
▲家庭の負担が大きい	18.6	42.5	38.9
自分にとってストレス解消	9.3	53.5	37.2
▲期待したほどではない	6.6	52.7	40.7
▲自分は興味を持てない	4.4	32.3	63.3

(%)

「ストレス解消になる」という項目は肯定度が低くなっているほか、全体に肯定のレベルは少し低下し(最高で73.9%)、上の利用者の結果には及びませんが、基本的には肯定的な方向で感じられているようです。

③ 利用も体験もされていない理由

では、現時点でまだ利用もお試しの体験もされていない方はなぜ経験されていないのか、ということについてお尋ねした結果は以下の通りです。



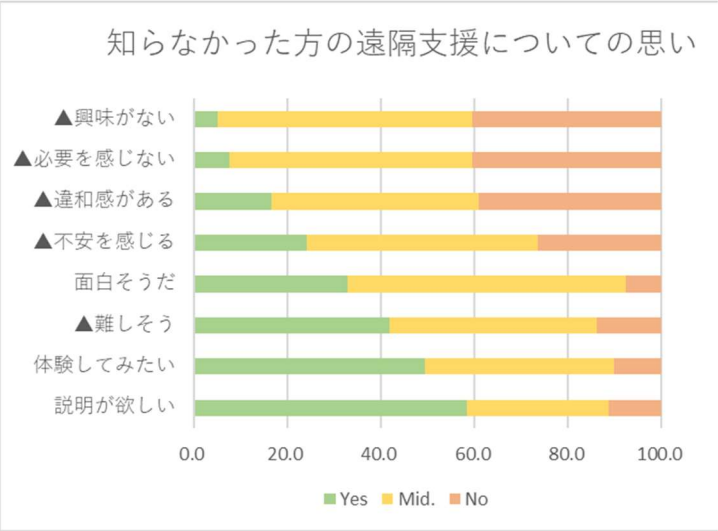
	Yes	Mid.	No
▲自分の子どもには無理そ	37.7	40.1	22.2
遠隔支援をよく知らない	28.8	36.1	35.1
▲対面支援でなければ意味	28.2	51.2	20.5
▲難しそう	28.0	41.3	30.7
薦められてない	25.5	29.9	44.6
▲面倒	15.6	42.1	42.3
▲必要無い	12.9	54.0	33.1
▲子どもが嫌がる	12.4	51.0	36.6
▲子どもの為になならない	7.4	42.1	50.4

(%)

選択肢には否定的な項目を挙げておきましたが、いずれも「そう思う」という方は少数です。最も比率の高いのは「自分の子どもには無理そう」（37.7%）というもので、「難しそう」などとともに、どちらかというと否定的というより、ためらっていらっしゃるような印象の答えが上位に来ています。

ただし、「対面支援でなければ意味ない」という、一種の療育支援への価値観から否定的に見られている方も28.2%いらっしゃることは注目すべき点の一つかと思われます。療育支援にはいろいろな見方、考え方があり、対面を重視するという姿勢もまた重要と思われるからです。

④ 遠隔支援の存在を知らなかった方の印象



	Yes	Mid.	No
説明が欲しい	58.2	30.4	11.4
体験してみたい	49.4	40.5	10.1
▲難しそう	41.8	44.3	13.9
面白そうだ	32.9	59.5	7.6
▲不安を感じる	24.1	49.4	26.6
▲違和感がある	16.5	44.3	39.2
▲必要を感じない	7.6	51.9	40.5
▲興味がない	5.1	54.4	40.5

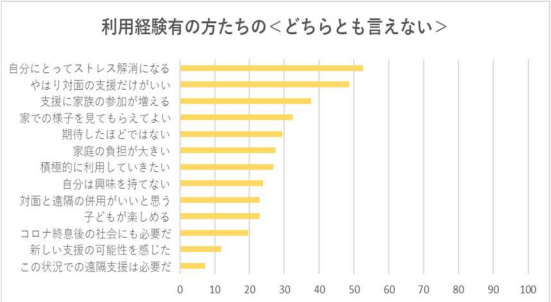
(%)

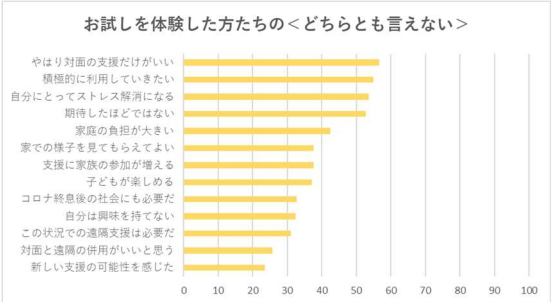
この調査まで遠隔支援についてご存じなかった方にその印象を伺ってみると、やはり否定的な、あるいは拒否的な答えはかなり少ないことがわかります。その中では上位に来るものも「難しそう」（41.8%）や「不安を感じる」（24.1%）など、積極的な否定というより、なんとなくためらっているような内容のものになっています。

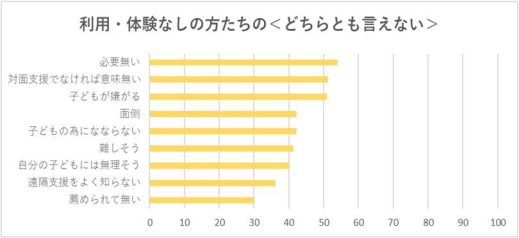
逆に遠隔支援の存在を知ることにより、「説明が欲しい」とか「体験してみたい」など、積極的な姿勢を示される方がほぼ半数以上になっています。

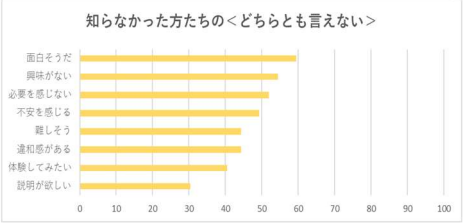
⑤ 遠隔支援経験の有無で、各項目の評価について何が変わるか

同じデータを少し違う形で比較することで、遠隔支援の経験のレベルの違い（現在利用中>過去に利用した>体験したことがある>利用も体験もしていない>知らなかった）によって何が変わるのか、ということについて、次のような大雑把な傾向が見えてきます（表中の数値はすべて%）。









上の二つのグラフは経験を持っている方たちが、各質問項目に対して「どちらとも言えない」と答えた割合で、s下の二つは経験のない方たちが同様に「どちらとも言えない」と答えた割合です。これを見ると、経験のない方たちは、否定的である、というより「どちらとも判断がつかない」という方が多い、という傾向が見えてきます。

この可能性についてはまた別のデータからも見ていくことにしましょう。

以上から、次のようなことが言えます。

1. 遠隔支援についてのこれまでの経験の有無にかかわらず、いろいろな角度からその意義をお尋ねしても、全体としてそれを否定的に見る方は少なく、肯定的に見る方が多い
2. さらにその傾向は利用者でより比率が高くなっている
3. 利用が無い方も、はっきりとした拒絶感や批判的な視点でそうなっている方は多くなく、「判断がつかない」という方が多くなっている可能性がある。

では次に、単に肯定的であるかどうか、という指標を超えて、そもそも保護者の方が今の状況で、あるいはコロナ終息後において、遠隔支援をどの程度必要と考えられているか、という点から分析を進めていくこととします。そしてその必要性についての認識が、【Ⅲ】利用経験の有無や【Ⅳ】子どもの年齢、【Ⅴ】障がいや困難の種別によってどのように異なるか、ということを順に検討していきます。

ワンポイント解説：統計的な検定について==========

本調査ではグラフに見られる数値の差について、それを統計的に意味のある差と言えるかどうかをχ（かい）二乗検定という検定手法で判断しています。

たとえばある高校の正門で、出てくる生徒の男女を数えていたら、合計10人まで数えた中で男子が7人、女子が3人だったとします。そのままの数では男子が多いわけですが、その結果から、「この高校は男子が多い」と判断してしまっていいでしょうか？けれどもこれを20人まで増やしたら、男子が11人で女子が9人になるかもしれませんし、男子は7人のままで女子が13人と逆転するかもしれません。

このように実際に数えた数（実測値と言います）には大小がありますが、それは真の割合（母集団の割合）を反映しているのか、たまたまその時そうだったのかはそれだけではわかりません。ここの例でいえば、以下に検討するように、遠隔支援をどの程度経験したかによって、答え方が変わるとしても、その違いは今回の一部の方への調査でたまたまそうなったのか、それとも全体を調べても同じ結論になるのかはわかりません。

そのように「一部の結果」から得られた差が単なる偶然ではなく、「全体の結果」と同じと考えてよいかを、確率論を使って分析する手法が統計的な検定と言い、χ二乗検定はそのうち、分類項目の度数分布を元にして行う検定になります。

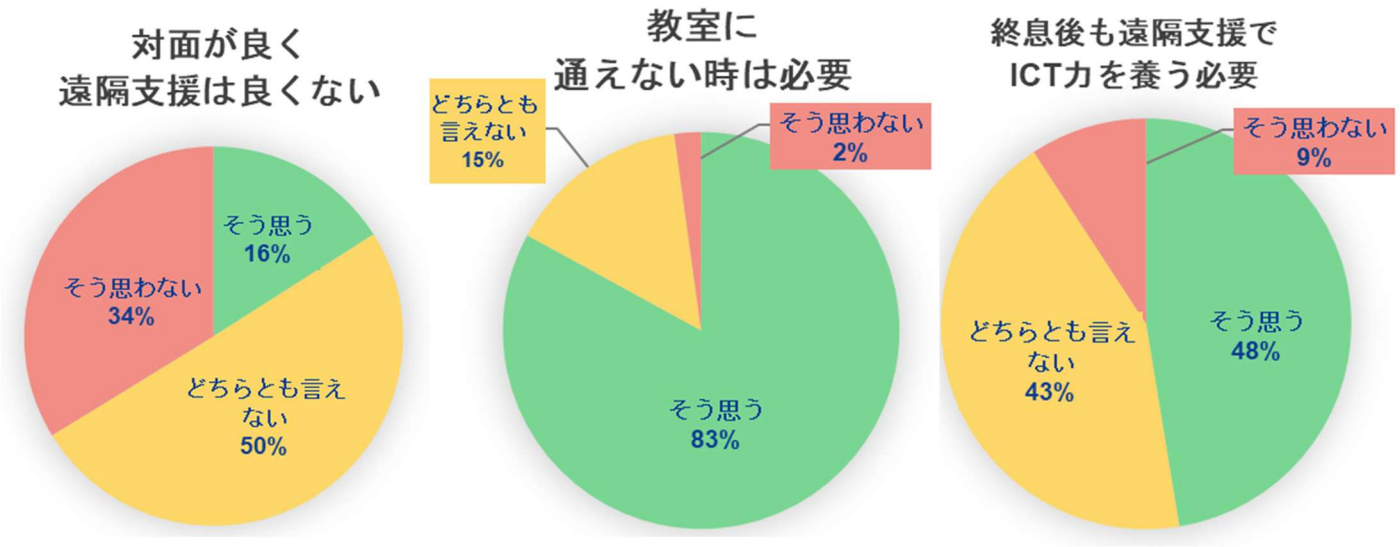
検定結果は確率（p であらわし、0≦p≦1の値をとります）で表され、たとえば p=.05 と表示されていれば、実測値で差が見られた場合、それが真の差と判断した時に間違えである確率は5%である（逆に言えば95%間違いない）、ということを意味しています。

「確率がこの値以下なら差があると認めてよいだろう」と認められる値は、分野などによっても異なりますが、ここでは p≦.1 の場合を「有意差がある」と考え、それ以上の場合は「差があるとは判断できない」として、以下の分析を進めます。

【Ⅲ】遠隔支援の必要性をどう思うか？

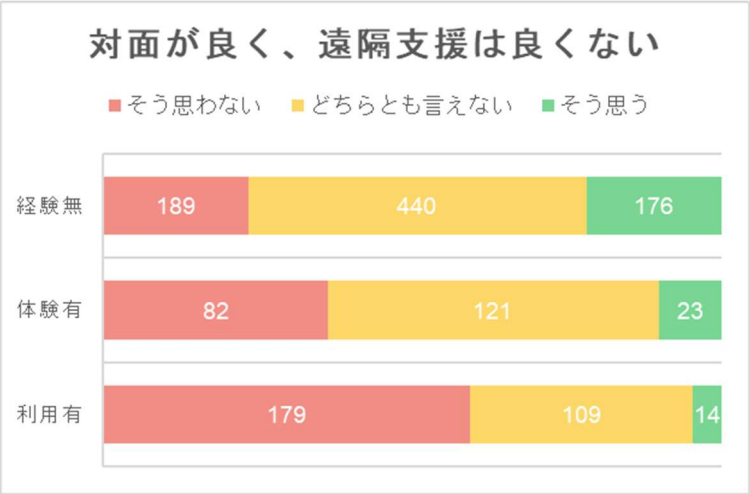
今の状況下やコロナ終息後において、ICT（情報通信技術）を用いた遠隔支援の必要性について
どう思われますか？（以下について、そう思う、どちらとも言えない、そう思わない、から選択）

1 支援は常に対面が良く遠隔支援は良くない
2 教室（事業所）に通えない時は必要
3 終息後も遠隔支援で ICT 力を養うのも必要

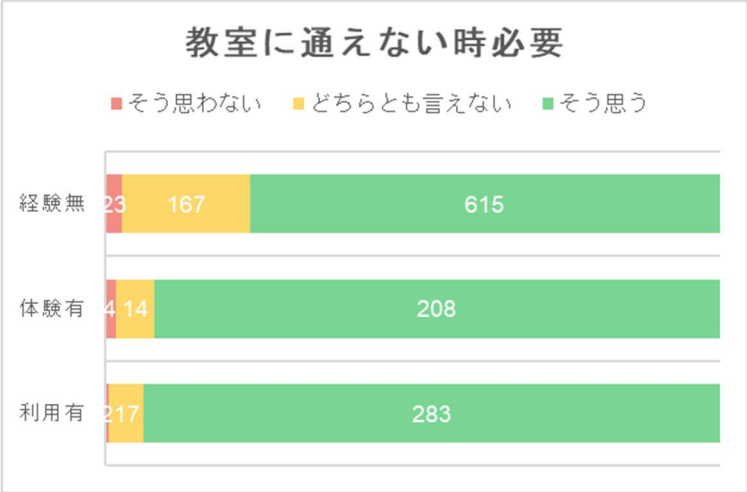


どの聞き方をしても、遠隔支援について否定的に答える回答は全体にかなり少数という結果になりました。新型コロナウイルスで教室に通えない時には必要と考える方が大多数ですし、それにとどまらず、このウィルス感染が終息したのちも、療育支援の中に遠隔支援を取り入れることに積極的な方が半数いらっしゃることがわかります。

では実際に遠隔支援を利用されている方（利用有）、試しに体験をしたことがある方(体験有)、利用も体験もしていない方（経験無）の間で、この意見に違いがあるでしょうか。次にこの三つのグループに分けてそれぞれの質問への答え方を見てみます。

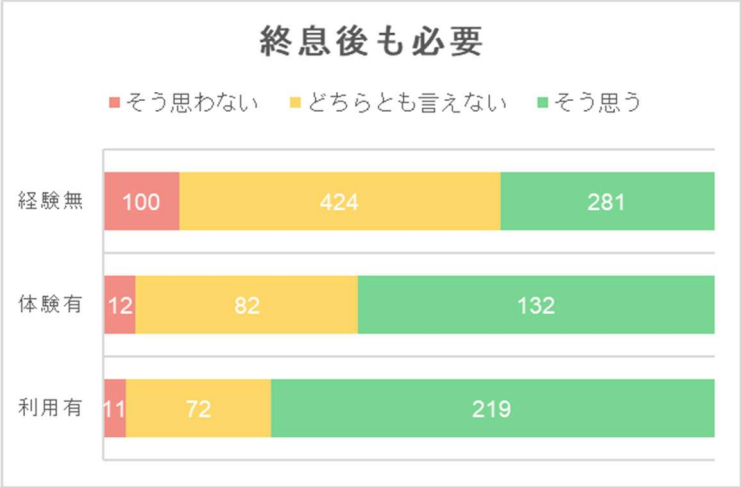


やはり療育支援は対面で行うべきで、遠隔支援は良くないと考える方は、全体として16.0%と比較的少数でしたが、その中では遠隔支援について全く経験がない方にそう答える方が多く、実際に利用したことがあったり、現在も利用されている方の場合はかなり少数になることがわかります。特に利用有の方は半数以上が「そう思う」と答えられており、「仕方なく遠隔支援を利用している」ということではなさそうです。



次にコロナなどで教室に通えない場合は必要と考える方が大部分ですが、経験のない方の場合はそのほかの方たちに比べ、少し迷う答えが多く見られます。

迷っているから経験しないのか、経験しないからよくわからないので迷うのか、その因果関係をこの結果だけから決めることはできませんが、いずれにせよ「良いか悪いか」と聞かれれば「遠隔支援は良くない」と思われる傾向が強い層でも、75.4%の方が遠隔支援は必要と考えられています。



ところで今の状況の中では必要と考える方が大部分ですが、終息後も必要と考えられる方はそれよりは少なくなります。けれども全体として半数近い 47.4%の方は、単にコロナで通えないからという理由ではなく、これからの療育支援には必要だと考えられており、さらにその割合は遠隔支援を実際に利用されるほど、大きくなり、72.5%にまで上ることがわかります。

三種類の方を比べると、「体験有」の方たちは、遠隔支援を試してみたことはあるが、なんらかの理由で継続利用には至っていない方たちですので、もしそれが「やってみたけれど、いいとは思えない」ということが主な理由であるとすれば、全体に否定的評価が経験無の方たちに近くなるか、場合によってはそれよりさらに強くなることが推定されます。しかし今回の結果ではそのような傾向は見られず、利用有の方たちよりは多少慎重な判断になるものの、必要性の認識自体はやはりかなり強いことがわかります（いずれの聞き方についても、経験のレベルによる評価の違いについて、χ二乗検定ではっきりとした差（p=.00）が認められています）。

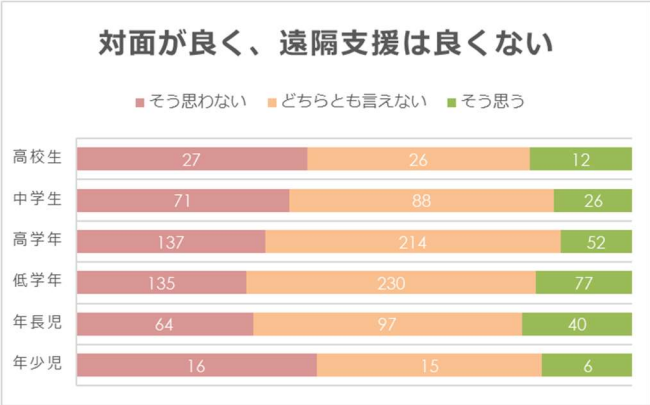
以上から次の三つの事が言えます。

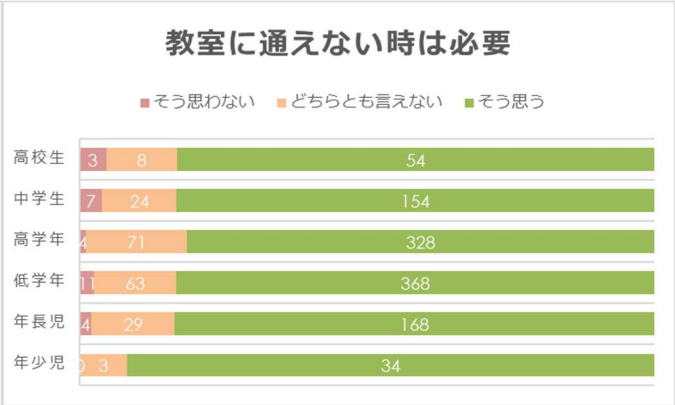
① 遠隔支援は大部分の方が必要と考えている。
② その必要性は新型コロナウイルス感染対策として考えられているばかりではなく、これからの ICT 社会に必要な、新しい支援の在り方として求める方が多い。
③ そのように考える傾向は、何らかの形で遠隔支援をすでに経験されている方たちの中でより強くみられる。

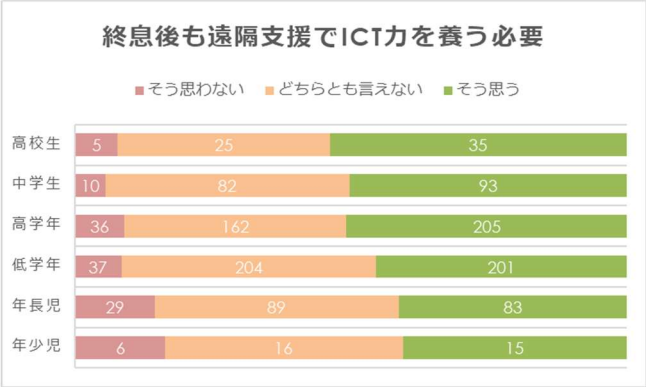
では、子どもの状態によってその認識にどのような差があるでしょうか。次に年齢の違いから見てみます。

【Ⅳ】子どもの年齢による遠隔支援への認識の差

子どもの年齢によって遠隔支援に対する評価が変化するかどうかについて見てみます。回答者を年少児（1～3歳）、年長児（4歳～6歳）、低学年（小1～3）、高学年（小4～5）、中学生（中 1～3）、高校生（高1～3）にまとめて検定を行いましたが、「終息後も必要」について差が見られただけで、あとははっきりとした細かい変化が得られませんでした。



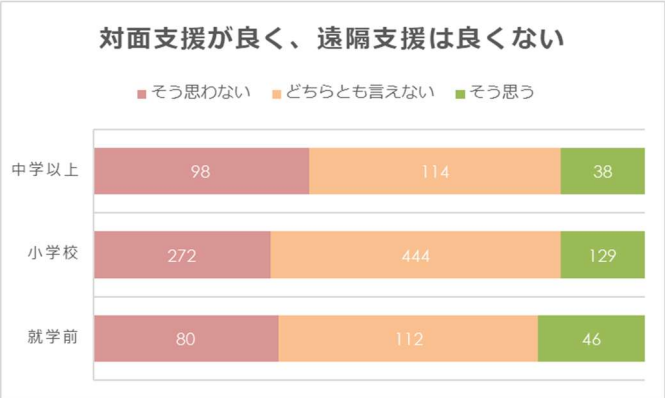


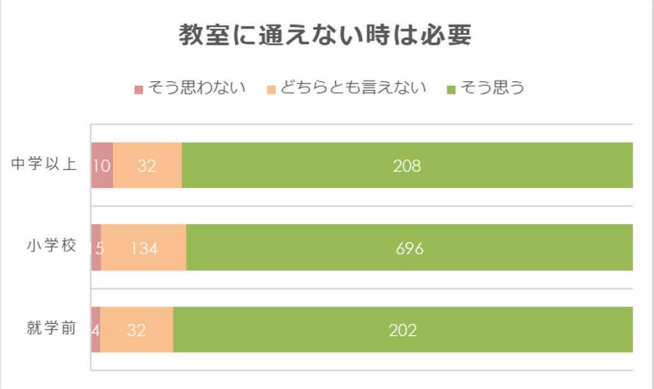


χ二乗検定の結果

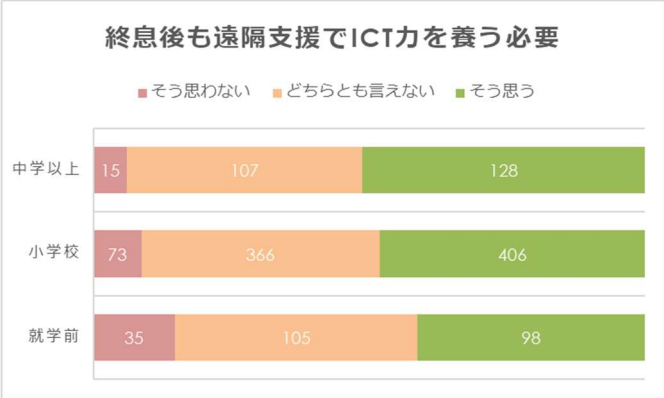
「体験が良く、遠隔支援は良くない」 p=.18
「教室に通えない時は必要」 p=.27
「終息後も遠隔支援で ICT を養う必要」p=.06

そこでもう少し大づかみに傾向を見るため、さらに大きく就学前（年少児＋年長児）、小学校（低学年＋高学年）、中学以後（中学生＋高校生）。に分けてこの結果を見てみます。





遠隔支援に否定的な意見については、小学生以上でやや少なくなり、中学以上で「そう思わない」が少し増えるようにも見えますが、比較的小さな変化で、統計的には有意になるまでには至りませんでした（p=.12）。また「教室に通えない時は必要」はもともとどの年齢層でも「そう思う」という回答が圧倒的に多いため、（就学前 84.95%、小学校 82.4%、中学以上 83.2%）目立った変化はありません（p=.17）。



これに対して「終息後も遠隔支援で ICT 力を養う必要」についてはわりとはっきりした年齢による変化がみられるようになり、年齢が上になるほど、必要と考える人が着実に増え（就学前 41.2%、小学校 48.0%、中学以後 51.2%）、不要と考える方は減っています（就学前 14.7%、小学校 8.6%、中学以後 6.0%）。当然のように統計的にも有意差がはっきり見られました（P=.01）。

これは年齢が上がるほど、将来「ICT を使った社会生活」の必要性についてリアルに感じられるようになる、と考えればわかりやすい結果です。いずれにせよすでに就学前からその必要性について 41%の方がそう思われている、という結果は、この傾向は今後ますます強まることはあっても、減っていくことはないだろうと推測されます。今後の療育支援の在り方を考えていくうえでも大事なポイントの一つとなると考えられます。

以上のことから次のように言えます。

1. 全体として子どもの年齢によって、判断が劇的に異なる、といった傾向までは見られなかった
2. 特に教室に通えない時には必要という判断が大部分で、年齢差は見られにくい
3. 逆に終息後の必要性については年齢とともにゆるやかに肯定的になる傾向が見られる
4. 新型コロナウイルス問題を超えての、ICT リテラシーの育成を視野に入れた形での遠隔支援の必要性の認識は現段階でもすでにかなり拡がってきている

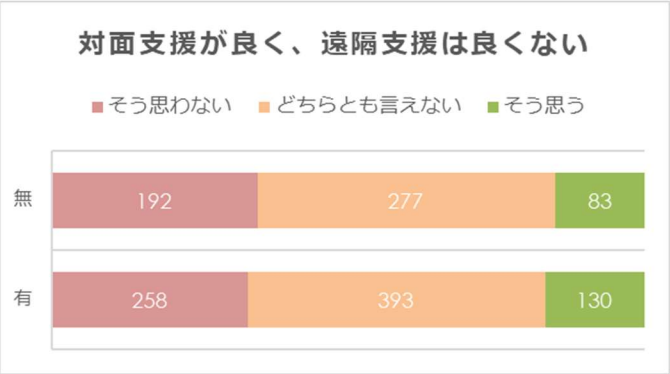
では障がいの種別や、抱えている困難の性質によってこの判断は異なるでしょうか？ 次にその点についてデータを検討してみます。

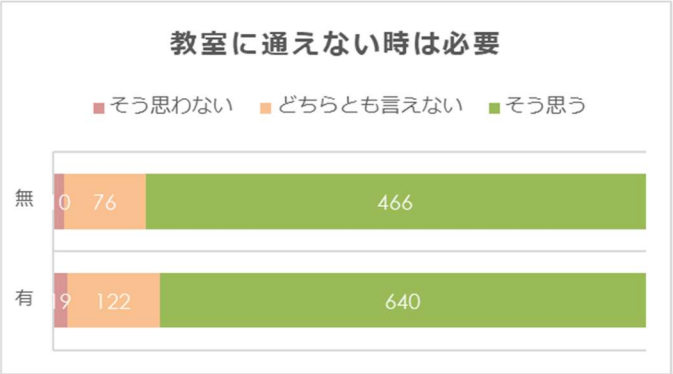
【Ⅴ】障がいや困難の傾向による違い

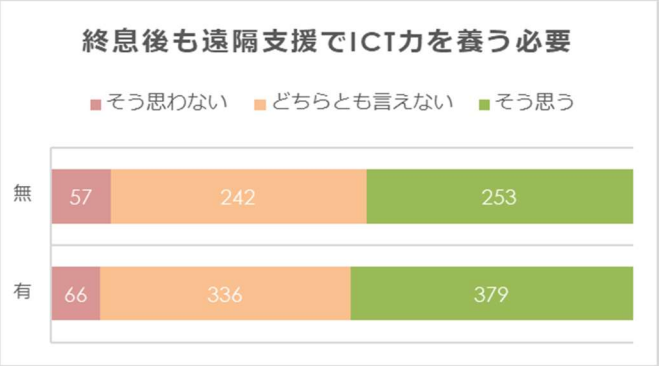
① 自閉症との関係

障がいや困難の種別については、当てはまるものすべてをチェックしていただきましたので、回答には重複があるため障がい間を直接比較することはできません。ここではそれぞれの障がいについて、チェックした方としていない方に分けて分析を行い、必要に応じて二つの障害を組み合わせて分類して分析します。

まず、自閉症の有無単独での結果は以下の通りです。

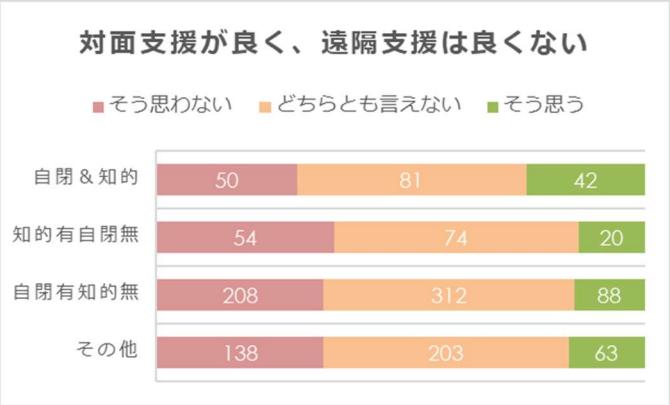






一見してわかるように、自閉の有無で大きな違いが見られません。もちろん統計的な有意差もありません。

自閉のお子さんの中には対面でのコミュニケーションもむつかしい場合もあり、ましてやパソコンなどの画面を通しての遠隔支援については否定的な意見が強まるかと思っていたので意外でした。そこで次に「知的障がい」を伴う場合はどうかについて見てみました。



まず自閉の有無と知的障がいの有無を掛け合わせ、「自閉症+知的障がい」「知的障がいのみ」「自閉症のみ」「その他（どちらも含まず）」に分けて、それぞれの方たちの遠隔支援必要性認識を調べてみます。

その結果、統計的に「差」が見られたのは「対面支援が良く、遠隔支援は良くない」という意見への回答に限られ(p=.09)、ほかは差が見られませんでした。

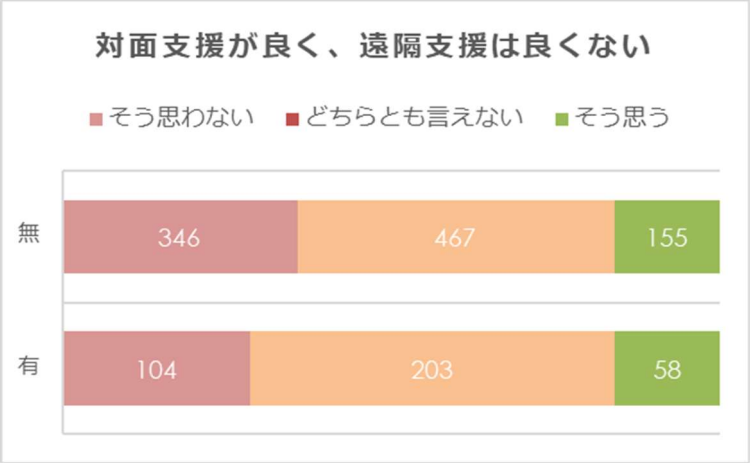
グラフを見ると、やはり「自閉症+知的障がい」の方たちの中で、「遠隔支援は良くない」と思われている方の比率が少し高いことがわかります（グラフ上から 24.3%、13.5%、14.5%、15.6%）。けれども知的障がいと自閉症の特性を共に持っている（いわゆるカナータイプだ）から遠隔支援については多くの場合否定的な見方になる、というふうに単純に決めてしまうことができないような、かなり微妙な差でした。

② ADHD との関係

次に ADHD の特性の有無との関係で見てみます。

統計的に有意な差があったのは「対面支援が良く、遠隔支援は良くない」という意見に対する回答のみでした(p=.03)。

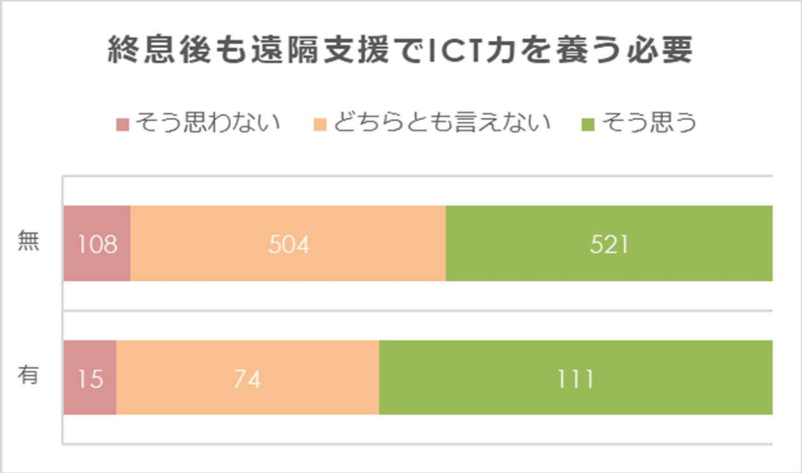
グラフを見ると、ADHD の特性を持つ場合の方が「どちらとも言えない」という判断保留の方が増え（有 55.6%、無 48.2%）、「そう思わない」（=遠隔支援は悪くない）と答える方がその分少し減っている様子が見られます。



これもやはり決定的な要因とは言えないようですが、注意欠陥や多動といった特性がある場合、遠隔支援に対して慎重な見方が少し増える、というのは理解できることでしょう。

③ LD との関係

次に LD との関係を見ます。



今度は有意差が見られたのは「終息後も遠隔支援で ICT 力を養う必要」の項目のみでした。(p=.04)

グラフを見ると、「そう思う」が多く（有 55.5%、無 46.0%）、その分「どちらとも言えない」という判断保留が少なくなることがわかります。

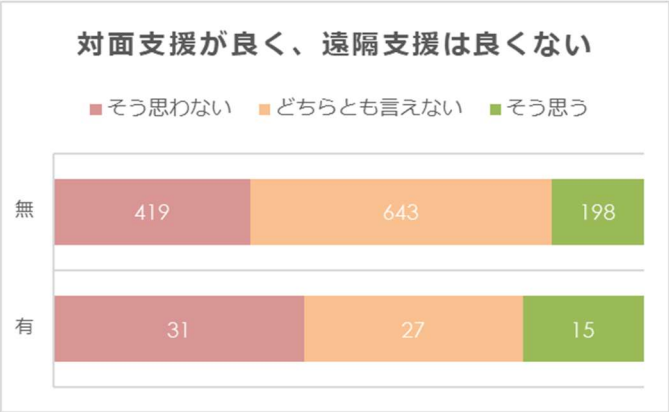
LD は、たとえば書字障がいや読字障がいで ipad などの IT 機器を使う機会が今もより多いため、このように「今後必要」という意識が強まっているのだと思われます。これも必要性認識を大きく左右する決定的な要因とまでは言えないものの、わかりやすい結果と言えます。

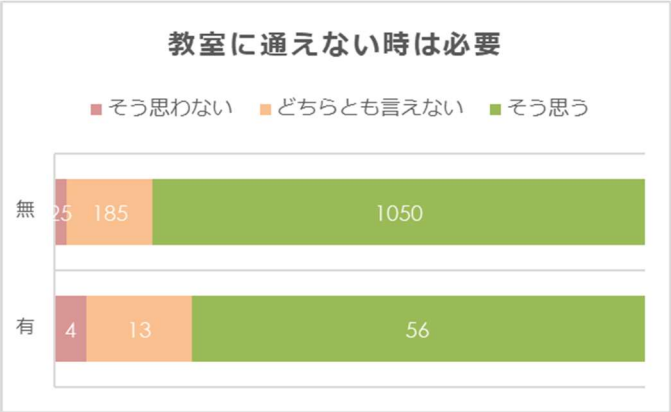
④ 知的障がいとの関係

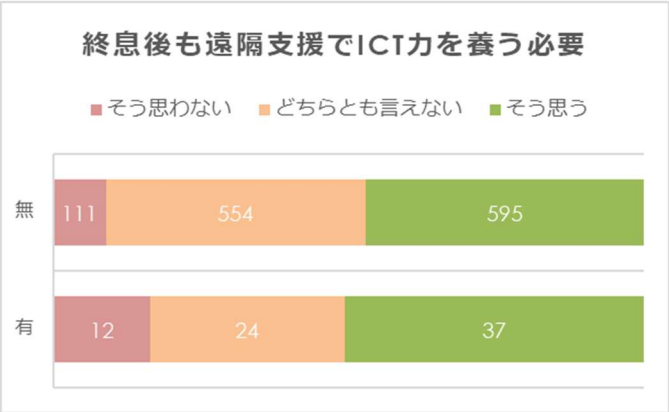
知的な障がいは、先ほど自閉症との組み合わせがあるときに、遠隔支援に対して少し否定的な見方が増えることを見てきました。しかし知的な障がいを単独で見た場合（知的障がいがあるかないかの単純な比較）、いずれの質問項目でも統計的に意味のある差が見られませんでした。すなわち、知的障がいがあるから遠隔支援に対して否定的な見方になる、とか、あるいは積極的になるといった傾向は特に見られないことになります。

⑤ 情緒障がいとの関係

これまで見てきた障がいの特性については、その有無で遠隔支援に対する態度には思ったほど大きな違いを生み出してはいませんでした。これに対して数は多くありませんが（チェックを付けた方 73 名に対し、チェック無しの方は 1260 名）、情緒障がいについては三つすべての質問項目について、統計的にも有意な差、あるいはその傾向が見られるという、これまでにない特徴を見出すことができました。







まず遠隔支援が良くないという意見に対しては、否定的な答えが多くなり（無33.3%、有42.5%）、統計的に差が認められます（p=.07）。

教室に通えない時に必要という項目はほかでは差が特に出にくい質問ですが、これも差が確認されますが（p=.10）、分かりにくいことにこの場合はむしろ肯定的な答えが少し減る傾向です。

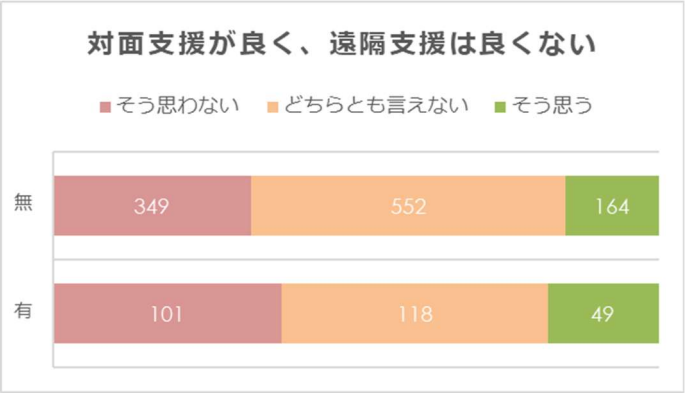
残る「終息後の必要性」を尋ねる項目では、有意差が認められ（p=.04）、こちらは肯定的な答えと否定的な答えが両方とも増えて「どちらとも言えない」が減るといったグラフになっています。

順に「肯定と否定が増える」「否定が増えて肯定が減る」「肯定と否定が増える」という、ややわかりにくい展開ですが、数としては少ないものの、否定の割合が少し増えるという点では一貫していると言えるかもしれません。この点に注目して解釈すると、情緒障がいを抱えている場合は、対面支援で子どもを支えてほしい、あるいは保護者方自身の支えへのニーズがより大きくなる、という可能性があるかもしれません。

ただ、統計的にもそれほどはっきりとした差とまでは言えないこともあり、保護者の方に異なる回答傾向の方が二極に分かれている可能性も考えられるなど、もうすこし慎重にその原因を分析していく必要がありそうです。

⑥ 言葉の遅れとの関係

言葉の遅れの有無については、「対面支援が良く、遠隔支援は良くない」の質問項目についてのみ、差(p=.07)が見られましたが、あとは大きな差はありませんでした。



グラフを見ると、否定的な見方（そう思う）と肯定的な見方（そう思わない）がどちらも少し増え、どちらとも言えないと判断を保留する方が減っている（無 51.8%、有44.0%）ことがわかります。情緒障がいの有無にもその傾向が見られましたが、言葉の遅れが遠隔支援に及ぼす影響について、その内容などの違いで判断が両極に分かれていくのかもしれません。

⑦ 社会性発達の遅れとの関係

この遅れの有無との関係では、回答傾向に統計的に意味のある差は見いだされませんでした。

⑧ その他

ほかにダウン症、ASP、不登校、自傷傾向、他害傾向、緘黙症の有無などについても回答していただいていますが、いずれもチェックされた方が少なく（5%未満）、統計的な検定を用いての判断がしにくいため、ここでは省略します。

⑨ 全体として

子どもが抱えている障がいや困難の種類によって、遠隔支援に対する態度が大きく変わる可能性があると考えていましたが、そのような直観的な予想に反し、今回の結果から見る限り、部分的にそれは見いだされるものの、全体としては著しく大きな違いが現れることはありませんでした。

その原因としてはいくつかのことを推定することができます。

まず、現時点では保護者の方は遠隔支援を経験している方の割合もまだ限られており、経験回数もまだ少ないことから、「子どもの具体的な状況に基づいて細かく判断する」というところまでは進まず、おおよその印象で答える方が多いからかもしれません。仮にそうであるとすれば、もう少し経験を積むことで、「遠隔支援を取り入れることが向いているタイプや場合」とそうでない場合の区別がもう少し見えてくる可能性があります。

次に、現時点でのこの分析は、自閉症と知的な遅れを組み合わせて検討してみたほかは細かい分析を行っておらず、単純な要因（たとえば自閉があるか無いかなど）ではなく、複合的な要因が違いを生み出す可能性もあります。これについては統計的な分析手法を超えて、多変量解析的な手法など、もう少し違った形での分析・検討が必要になるかもしれません。

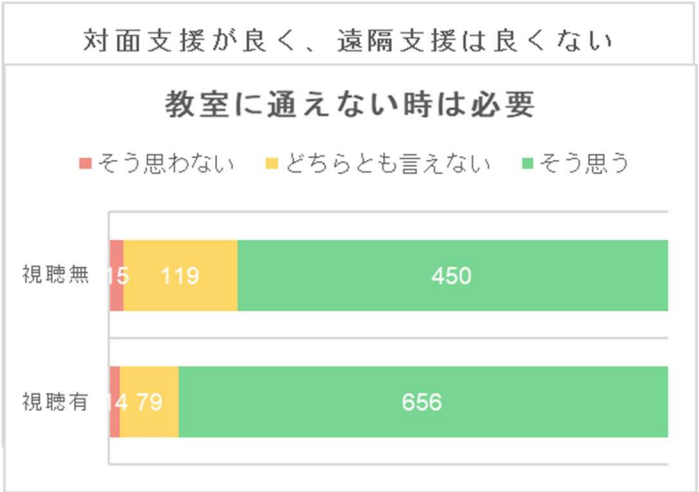
以上の結果全体をまとめると、以下のようなことが言えます。

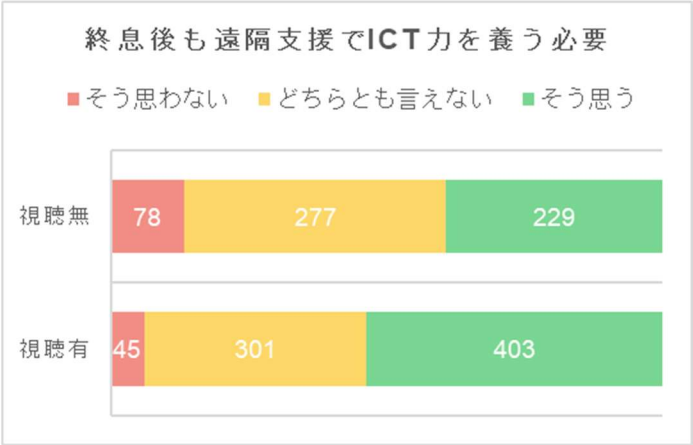
1. 遠隔支援の良し悪しを聞く質問項目については、その障がいまたは困難があると、①自閉+知的な遅れ②ADHD③情緒障がい④言葉の遅れ、で判断に否定的な回答が少し増えたり（①）、あるいは判断留保が減って肯定と否定がどちらも増える（②～④）、といった違いが見られた
2. 今後の遠隔支援の必要性については、LD の特性を持つ場合には必要とする意見が少し増えた
3. それ以外には明確な差は見いだされなかった
4. 全体にそれぞれの障がい特性や困難の有無で単純に決まるものではなく、それがあれば少し変化が起こる、といった程度のものであり、基本的には全体的な傾向と大きくは異ならなかった。
5. どういう場合に遠隔支援の導入がより積極的な意味（または消極的な意味）を持つかについては、さらに個別のケースを丁寧に見て判断していく必要があると考えられる

【Ⅵ】遠隔支援説明動画の視聴の有無との関係

アンケートでは、後半で遠隔支援の実際の工夫や意味について、簡単に実例紹介をする16分の動画を希望者が視聴できる形になっており、その後に視聴者は必要性の有無について改めて尋ねる形になっていました。

そのため、実際に視聴した回答者（大体見た545名と半分くらい見た204名の計749名）と見なかった回答者（冒頭のみ見た256名と見なかった328名の計584名）で、必要性の考え方に違いがあるかを見てみます。





グラフを見ると、視聴をした方は「対面支援が良く、遠隔支援は良くない」という質問項目に対しては否定的な意見（＝遠隔支援は悪くない）が増えており、「教室に通えない時は必要」という質問項目には「どちらとも言えない」という保留が減って肯定が多く、「終息後も遠隔支援でICTを養う必要」についてもやはり肯定的な意見が増加し、否定的な意見は減少しているのがわかります（いずれも p=.01 で統計的にも有意な差）。

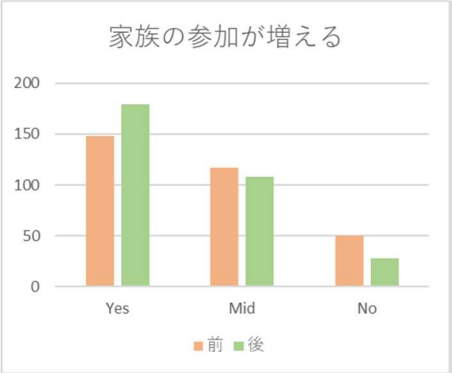
これについては、遠隔支援に具体的なイメージが持てずにいた人が、動画によってある程度イメージできるようになり、肯定的な判断が増えた可能性もありますし、単に肯定的な人は動画を積極的に見ようとし、否定的な人は見ようとしなかった結果という可能性もあり、この分析だけでは結論を出すことができず、もう少し他の質問項目などとの関係で分析をしてみる必要があります。

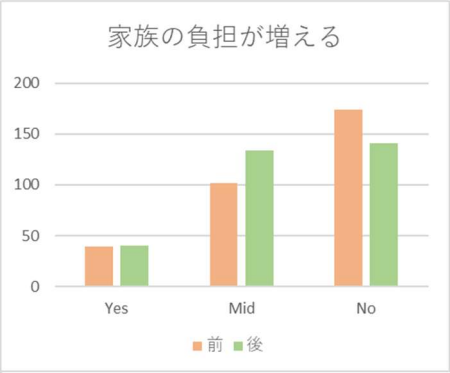
先に分析したように、遠隔支援の経験が多い人ほど肯定的にそれをとらえる傾向が見えていましたので、前者の可能性も十分ありえます。仮にそうである場合には、遠隔支援の具体的な内容を知ることにより、よりその可能性を感じて肯定的に考えるようになられると考えられます。また、後者である場合には、何が遠隔支援の利用に対して否定的な意見につながる要因となっているのかについてさらに検討する必要があります。

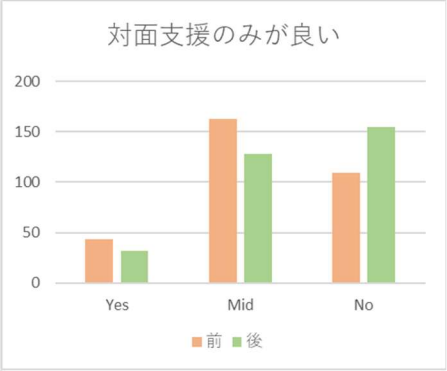
次により細かい回答項目にく分けて分析することで、そのどちらが有力な解釈であるかをもう一歩検討してみます。

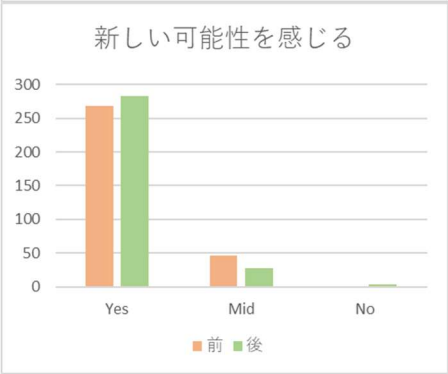
遠隔支援の利用経験について、現在または以前利用していた方やお試しを体験された方については、その時に感じられたことを「支援に家族の参加が増える」「家庭の負担が大きい」「子どもが楽しめる」「自分は興味を持てない」など、肯定的な意見や否定的な意見を織り交ぜて13項目について、動画視聴の前後に二回お尋ねしています。

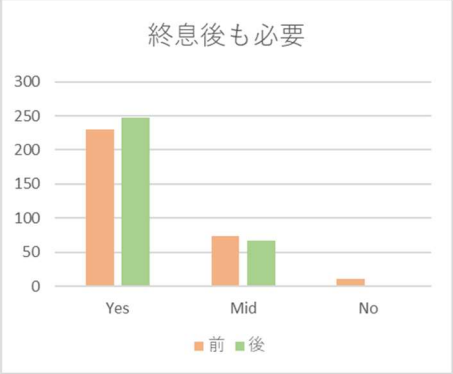
もともとこの方たちは基本的に肯定的に答える傾向が強いので、動画視聴による変化は出にくい（天井効果と言います）可能性があるのですが、それでもそれぞれの項目の評価について、動画視聴の前後を比べてみたところ、以下の 13 項目中5項目で有意差が得られました。（Yes は「そう思う」Mid は「どちらとも言えない」No は「そう思わない」）











χ二乗検定の結果

家族の参加が増える　p=.01

家族の負担が増える　p=.02

対面支援のみが良い　p=.00

新しい可能性を感じる　p=.04

終息後も必要　p=.01

これらを見ると結果はかなりクリアで、家族の参加が増える、新しい可能性を感じる、終息後も必要、といった肯定的な評価はいずれも増加しており、逆に家族の負担が増える、対面支援のみが良い、といった否定的な評価は減少しています。

遠隔支援未経験の方たちについては同じ項目で前後の比較が出来ないので、断言はできませんが、この二つの結果を見ると、おそらく動画視聴によって内容を知ると、肯定的な評価が増える可能性が高いと考えられます。

以上から次の事が言えます。

1. 動画視聴をした方たちと、していない方たちを比較すると、前者の方が遠隔支援の必要性を強く感じている人が多い。
2. 遠隔支援を経験したことのある方たちは、動画の視聴によって、その傾向がさらに強まる
3. 遠隔支援について具体的に経験したり、内容を知ることで、積極的な評価が強まると考えられる

【Ⅶ】自由記述から

アンケートでは途中5カ所（ただし質問に分岐があるため、一人については2、3カ所程度）、項目選択を行った後にその他の意見があれば記述していただき、また最後に全体を通しての自由記述の欄を設けました。

これに対して 134 名の方から以下の数の自由記述が寄せられています。（なお一人で複数の自由記述回答を行われている方もあるので、合計は 134 にはなりません。）

① 遠隔支援でのお子さんの様子はどうでしたか？上の選択肢以外に何かありましたらお教えください。	27
② 保護者の方ご自身はどう思われますか？上の選択肢以外に何かありましたら教えて下さい。	17
③ お試しで遠隔支援を体験した方にお伺いします。体験してみて保護者の方ご自身はどう思われますか？上の選択肢以外に何かありましたらお教えください。	16
④ 遠隔支援をご存じなかった方にお尋ねです。遠隔支援についてどう思われますか？上の選択肢以外に何かありましたらお教えください。	0
⑤ 動画をご覧になった方には、この動画を見て改めてお尋ねします。遠隔支援についてどう思われましたか？上の選択肢以外に何かありましたらお教えください。	28
⑥ その他遠隔支援について、なにかご意見やご提案などがありましたら自由にお書きください。	82

内容にわたる詳細な検討はまた別の機会に行うこととし、ここではそれぞれ「肯定的な意見」「改善点の指摘」「否定的意見」の三つに分類した結果と、代表的と思われる意見について例示するにとどめます。ここで「改善点の指摘」というのは、見方によっては否定的な意見とも理解できるものもありますが、改善可能性のあるポイントが指摘されている場合を取り上げ、現実的な改善の可能性が見えないものを「否定的意見」として区別しています。

また合計数が上の表と異なる場合、少ない分はいずれにも分類不能な注意書きなどになります。なお、②③⑤の質問項目は同じであるので、これをまとめて表示します。

	意見の方向	数	具体例
①	肯定的意見	6	「支援もしっかりしてもらえる上、本人がタブレットを使いこなせるようになり、現代の ICT 社会に合っている。とてもいい。」 「仕方のないことですが、遠隔支援が終わってしまうことは悲しいです。先生たちの努力もありますが、いつも以上に、学習に集中できていました。いつもと違うやる気に驚いています。送迎がないことも利用のしやすさに繋がっていると思います。自粛の時期に、本当に助かりました。質問ですが、今後、コロナの流行によっては、遠隔支援が再開するかもしれないとも伺いました。例えば、転勤などで遠方に引っ越した場合も、今のきらり、なれた先生と一緒に勉強をすることはできますか。何かの方法で回答が頂ければ嬉しいです。一応、先生にも同じ質問をさせていただきました。今すぐにはお返事できません。でも、担当している人としては嬉しいお言葉ですと仰っていました。」
	改善点指摘	17	「関心はあるがカメラと自分の位置関係が分かりにくかったり、遠隔でないため向こう側の雰囲気が掴みにくいため集中力に欠け一体感が得られにくかったように感じた。また、1 時間画面に集中することが難しかったようで、画面の前に座り

			続けることが難しかったようだ。」 「家族以外の人と会えない状況の中、遠隔とは言え、慣れ親しんだ療育の先生の顔が見え、声が聞こえるということが、子どもにとって大きな気分転換になっています。しかし慣れてくるにつれて、自宅と言う環境のためか、支援中に甘えたような、だらけたような様子も見られるようになって来ました。また、下の子が一緒に参加したがり、結果的に集中力を削がれてしまうのが大きな課題です。」
	否定的意見	2	「なるべく早く遠隔支援をやめたい。印刷などてまだし年配の母に嫌がられる。このまま遠隔支援が続くなら、やめたいと言っていた。 「対面の方がたくさん遊べてよいとのこと。」
② ③ ⑤	肯定的意見	16	「私自身がフルタイムで仕事をしているため仕事で送迎できない時や、長期休暇などで遠方にいる時、入院中などでも利用できて、とても良い。ずっと続けて欲しい。保護者が一緒に入れなくても遠隔で支援の様子を見ることができて安心する。私達にたとても合っている方法のひとつだと思います。」 「対面を避けざるをえない状況での遠隔支援には親子共に本当に助けられています。対面だからこそ可能な支援も多くあると思うので、平常時はやはり対面が望ましいと思いますが、悪天候で徒歩移動が難しい日や、きょうだいの体調不良等で送迎が難しい日など、これまでは止むを得ず欠席していたような状況の際に、遠隔支援が利用できると非常にありがたいです。コロナ終息後も気軽に選択できると助かります。」 「子が元気でも、送迎の親の体調が悪い場合や、子が平熱で元気でも咳など軽い風邪症状がある場合に、遠隔支援で利用できるのがとても良いと思う。」 「ICT リテラシーやVR世界等、今後の子供達の社会変化に対応出来るように、子供だけでなく大人(親)が先行して、社会変革期に対応出来るようにしなければいけないなと思います。」
	改善点指摘	16	「思ったよりも子供が楽しんでやっているし、動画を見るように集中している姿も見られるので、今後も続けて欲しい。ただ、先生もこちらも使い慣れてないので使いこなせるように勉強してもらいたいと思う。」 「子どもが興味を持ってやっているのはわかっているがあちこち触って、機械音痴の私にとっては壊れたり、変なことにならないだろうかとヒヤヒヤしていた。」 「音声が途切れることが、本人にとって不快なようで聞き取れずに苛立っている。遠隔支援に慣れてくると子供がだらけてきたり、受け身の支援になるので積極性がなくなってきている（別のオンライン授業を利用して）」 「遠隔支援自体は良いと思うが、兄弟が邪魔になり、本人が集中しにくい」
	否定的意見	6	「コロナの影響だからこその遠隔支援に意味があると思ってきた。状況に応じて必要性は感じるけど、基本は「家族・保育士」以外からの「直接的な支援」が本人の向上に繋がると、思っているので普段から遠隔支援は望まないし、習慣付かないと思う。」 「体験だけでしたが、支援が必要な子に遠隔で支援するというのは、無理だと思いました。」 「一年生なので、親がずっとついていないといけないので負担。」
⑥	肯定的意見	30	「これからの時代にはこういったやり取りが社会的にも必要になってくるかも知れ

			ないので、支援が必要な子どもが操作や遠隔対面作業に慣れておくのはいい事だと思う」 「対面も遠隔も両方必要だと思います」 「今回は、新型コロナウィルスの為、外出ができず、遠隔支援を利用しました。家族だけの世界にならず、先生と繋がることで、精神的に家族皆とても助かりました。また、支援があることで生活リズムを崩すこともありませんでした。発達障害、何かの理由で、どうしても通所できなくなることもあると思います。家に引きこもってしまう事もあるかもしれません。社会と繋がり続けるためにも、このような支援は必要と思います。この支援がきっかけとなり、支援を受けたり、また将来 PC を通して働くきっかけをつかめる社会になる事を願います。」 「コロナでなくともインフルエンザの回復期で元気だが登校できない日などは利用できたりすると良いと思うのと、入院中などでも体調環境次第で利用したりどのようなシーンでも活用できる環境であってほしい」 「コロナ終息後でも例えば大雪など天候が悪い時や都合で送迎が難しいような時にも臨機応変に遠隔に対応して下さるとキャンセルや変更もなく支援して頂けるのかなと思いました。」 「これじゃなきゃ、ではなく、色々な支援の形ややり方の可能性は、どんどん試していきたい。100 人いれば 100 通りの個性があり、支援の形も 100 通り欲しい。遠隔も対面も、緊急時に限らずバランスよく取り入れていけたら良いと思う。」
	改善点指摘	37	「子供によって向き不向きがあると思うので、一律には決められないものと思います。個別に対応していただけると、多種多様な発達障害に対応できるのではないかと思います。」 「家での支援となるとおもちゃが目に入ったり、何かに集中を奪われたり…と気持ちが支援に向かないのではと思うところもあります。」 「動画を見たらメリットもあるなとさらに感じた。ただ今現在学校の宿題でさえ家で進めることが困難で助けてもらっている中で利用を考えると負担の方が多い。ただ最初の取り掛かりを教室の中で行いタブレットの使い方や遠隔操作を知ることは取り入れてもらいたい。利用しているさくら眼科さんでタブレットの指導が始まったがここでもやってくれて、その先に遠隔支援をしていく方向なら助かります。」 「子供が通信端末の使用方法等についてある程度熟知する必要がある。複雑なことが子供を困惑させてしまう可能性がある。」 「ツールとして個別にマッチする場合も沢山あるとは思うが、個別ケースに対応する内容の精査が、行われる必要があると考えます。年齢が上がるほど効果があるのではないかと想像はしていますが、実際はわかりません。現状(小 4)では対面支援の方が望ましい気はしています。」 「とにかく指導する側の、オンライン知見、技術、指導力が、当たる先生がよい、わるいといった（現実もそうだが、今の担当の先生と考えると無理との判断）運によるところが大きいのが不安。動画にでてくる方は、きっと錬られているからあまり参考にはならない。でも、よい指導を受けられるなら、ぜひオンラインでやりたい気持ちはあります。」
	否定的意見	15	「支援は対面の方が良いと思う。」

			「まだ意味がわからず、集中力のない低年齢にはあまり意味がないように感じます。」 「こだわりが強い子には納得して向かわせるだけで大変です。お互いに疲弊します。」 「遠隔支援と ICT が養えるとは思っていない。また、コロナの影響での対面の代替手段でしかないと考える。子供にとっては五感で感じることができる対面の方が有意義であり、親にとって安心感があり、負荷軽減にもなる。」

これらの意見を拝見すると、新たに以下のようなポイントが見えてきます。

1. 肯定的に見る方には、単なる代替手段ではなく、ICT を含むこれからの多様な新しい療育支援の可能性に注目している方が多い。
2. 親の都合や子どもの身体の状態、通所の困難さなどを考えたときに、遠隔支援の形態がそれらの問題への有効な対処法である、と感じている方が多い。
3. 改善点としては、機器の操作、兄弟に学習の支援を邪魔される問題、慣れてくるとダレが見られること、支援者側の技術的な未熟さなどがあげられる。
4. 否定的に受け止める方は、本来療育支援は本来対面状態で行われるべきであるという考えの方が複数いらっしゃる。
5. また、教室に通うことで子どもから手が離れる時間が確保できることの重要性を強調されたり、障がい種別などによりそもそも無理だと考えられている方もある。

【Ⅷ】まとめ

今回のアンケート調査の初歩的な分析を通して、冒頭に述べた調査目的について、次のようなことが明らかになりました。

目的①　新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、その代替手段として導入が図られた遠隔支援について、利用者は現時点でどのように受け止めているかを明らかにする。

基本的に現在の状況の中で、遠隔支援の必要性についての認識は非常に強い、ということがわかりました。

さらに、それは単に新型コロナウイルスの感染予防のために「事業所（教室）に通えないから」その代替手段として、ということを超えて、子どもや親の体調、都合、遠距離で通えないのが大変など、普段の状況からも必要だという意見もいくつも見られます。

現在テレワークが浸透する中で、同様に普段からテレワークを活用することの利点の理解が広まってきていますが、同じことが発達障がい児の支援についても起こっていると考えられます。

目的②　新型コロナウイルス感染が終息したのち、遠隔支援を行うことの必要性について、利用者がどのように考えているかを明らかにする。

ICT 社会の進展を見通して、終息後も積極的に展開する必要があると考える保護者の方が、現段階で既に半数近くあります。

また、遠隔支援の導入により、これまでにはない新しい支援の形の可能性を感じることができる、といった見方をする方も非常に多くありました。

今後の ICT 社会で生きる子どもたちへの支援に関心を強く持たずにはおれない保護者の方たちだからこそ、そのようなことに対してより敏感になられているのかもしれません。

目的③　遠隔支援の実施についての利用者の意識が、お子さんの年齢や障がい種別などの諸条件によってどのような違いがみられるかを明らかにし、実施に際する配慮の必要性について検討する。

お子さんの年齢や障がい種別による遠隔支援の意識の差は、全くないわけではありませんが、しかし調査者が当初予想していたほどには大きな違いは見いだされませんでした。

それよりもその意識の差に大きく関係していると思われたのは、① 利用経験の有無 ② 具体的な内容についての知識 で、利用経験がある方が、また具体的な内容についてより多く知る方が、現在やコロナ終息後の遠隔支援の必要性についての認識が強くなることはほぼ間違いないと考えられる結果でした。

したがって今後、遠隔支援についてさらに工夫が積み重なり、その内容をみなさんが身近に知ることができるようになるほど、必要性の認識、新たな可能性への期待が強まっていくことが十分に予想されます。

同時に、数としては少数ですが、遠隔支援に対して否定的な見方をされている方の存在も無視できません。これについてはさらなる分析が必要となりますが、「発達障がい児への支援は子どもとの直接の触れ合いの中で行われるべきだ」という信念を持たれているなどの可能性も考えられます。

また、遠隔支援の必要性を感じられている多くの方も、「遠隔支援だけが必要」と考えられているわけではなく、その両方が必要で、柔軟に使い分けることを求められていると考えられるデータになっています。

したがって今後は、どのような家庭の、どのような特性を持つお子さんに対し、どのような遠隔支援や対面支援がどのような割合で必要になるのか、ということについてのきめ細かい検討を丁寧に積み重ねていくことが必要になってくると考えられます。

資料「質問項目」

A.　遠隔支援の利用状況について

Q.これまで遠隔支援について利用されたことがありますか？

今現在正式な支援として利用している（⇒ Ｂへ）

以前正式な支援として利用したことがある（⇒ Ｂへ）

お試しで教室（事業所）と家庭をつないで体験してみたことがある（⇒ Ｃへ）

お試しで教室（事業所）内で体験してみたことがある（⇒ Ｃへ）

利用もお試し体験もしていない（⇒ Ｄへ）

遠隔支援について知らなかった（⇒ Ｅへ）

B.　遠隔支援を利用したことのある方へ（⇒ 回答後Ｆへ）

Q.1　お子さんが複数いらっしゃる場合、一番上のお子さんについてお答えください。遠隔支援を利用したことのある方にお伺いします。これまでに何回利用されましたか？

1回　2回　3回　4~6 回　7~9回　10 回以上

Q.2　遠隔支援でのお子さんの様子はどうでしたか？（そう思う、どちらとも言えない、そう思わない）

集中していた	先生に会えて喜んだ	集中がむつかしかった
興味を持てていなかった	抵抗感がありそう	対面支援と違う姿が見えた
嫌がった	ストレス解消になった	自宅で安心して取り組める
楽しそうだった	積極性が見られた	対面支援の方がよいと言う

Q.3　上の選択肢以外に何かありましたらお教えください。（自由記述）

Q.4　保護者の方ご自身はどう思われますか？（そう思う、どちらとも言えない、そう思わない）

支援に家族の参加が増える	自分にとってストレス解消になる
家庭の負担が大きい	この状況での遠隔支援は必要だ
子どもが楽しめる	対面と遠隔の併用がいいと思う
自分は興味を持てない	期待したほどではない
家での様子を見てもらえてよい	コロナ終息後の社会にも必要だ
やはり対面の支援だけがいい	積極的に利用していきたい
新しい支援の可能性を感じた	

Q.5　上の選択肢以外に何かありましたらお教えください。（自由記述）

C.　お試しで遠隔支援を体験した方へ（⇒ 回答後Ｆへ）

Q.1　お試しで遠隔支援を体験した方にお伺いします。体験してみて保護者の方ご自身はどう思われますか？

※ 質問項目と回答選択肢はＢの Q4と同じ

Q.2　上の選択肢以外に何かありましたらお教えください。（自由記述）

D.　遠隔支援を利用も体験もしたことがない方へ（⇒ 回答後Ｆへ）

Q.1　遠隔支援を利用も体験もされていない方にお尋ねします。利用・体験されていない理由にはどのようなことがありますか？（そう思う、どちらとも言えない、そう思わない）

遠隔支援をよく知らない	必要無い	自分の子どもには無理そう
薦められて無い	対面支援でなければ意味無い	面倒

子どもが嫌がる　　難しそう　　子どもの為になならない

Q.2　上の選択肢以外に何かありましたらお教えください。（自由記述）

E.　遠隔支援をご存じなかった方へ（⇒ 回答後Ｆへ）

Q.1 遠隔支援をご存じなかった方にお尋ねです。遠隔支援についてどう思われますか？（そう思う、どちらとも言えない、そう思わない）

興味がない　　違和感がある　　面白そうだ

説明が欲しい　　必要を感じない　　難しそう

体験してみたい　　不安を感じる

Q.2　上の選択肢以外に何かありましたらお教えください。（自由記述）

F.　遠隔支援の実際について

発達支援研究所の「はつけんラボ」の公開講座で、遠隔支援についての動画による説明を行いました。遠隔支援の実際について、お時間と興味がある方は、よろしければぜひご覧ください。ご覧にならない方はその下の質問に答えてから「次へ」のボタンを押してください。この公開講座の全体は「はつけんラボ」でご覧になれます。はつけんラボは「はつけんラボ」で検索してください。

<動画挿入>

Q.1 動画をご覧になりましたか？

だいたい見た（⇒ Ｇへ）　半分くらい見た（⇒ Ｇへ）　最初だけ見た（⇒ Ｈへ）　見なかった（⇒ Ｈへ）

G.　半分以上動画を見た方へ

Q.1 動画をご覧になった方には、この動画を見て改めてお尋ねします。遠隔支援についてどう思われましたか？（そう思う、どちらとも言えない、そう思わない）

※ 質問項目と回答選択肢はＢの Q4と同じ

Q.2　上の選択肢以外に何かありましたらお教えください。（自由記述）

H.　みなさんにお尋ねです

Q.1 遠隔支援を行う場合、次のことについて、状況はいかがですか？（良い状態、どちらとも言えない、悪い状態）

家庭の通信状態　　遠隔支援教材の準備　　実施に向けた教室のサポート

必要な機器が家に揃う　　子どもの積極姿勢　　家庭での支援スペースの確保

Q.2 今の状況下やコロナ終息後において、ICT（情報通信技術）を用いた遠隔支援の必要性についてどう思われますか？（そう思う、どちらとも言えない、そう思わない）

支援は常に対面が良く遠隔支援は良くない　　終息後も遠隔支援で ICT 力を養うのも必要

教室（事業所）に通えない時は必要

Q.3 その他遠隔支援について、なにかご意見やご提案などがありましたら自由にお書きください。（自由記述）

I．　最後にお子さんなどについてお尋ねします

よろしければ教室（事業所）に現在通っているお子さんについて教えて下さい。複数いらっしゃる場合、年上のお子さんについて教えて下さい。

Q.1 お子さんは何歳ですか？

1歳 2歳 3歳 4歳 5歳 6歳（就学前） 小1 小2 小3 小4 小5 小6 中1 中2 中3 高1 高2 高3

Q.2 お子さんの性別を教えて下さい

男　女　その他

Q.3 お子さんの障がい種別などについて、該当するものすべてにチェックをお願いします

自閉症スペクトラム障がい（ASD）または広汎性発達障がい（PDD）

注意欠陥多動性障がい（ADHD）

学習障がい（LD）または限局性学習障がい（SLD）

アスペルガー症候群	言葉の遅れ	他害的な行動傾向
ダウン症	社会性発達の遅れ	緘黙症
知的障がい	不登校	
情緒障がい	自傷的な行動傾向	

Q.4 お住まいの地域は以下のどれにあてはまりますか？

特定警戒が継続する都道府県（北海道・東京・神奈川・千葉・埼玉・大阪・京都・兵庫）

特定警戒が解除された県（茨城・岐阜・愛知・石川・福岡）

その他の各県

Q.5 ご記入下さったのはどなたでしょうか？

母親　父親　祖母　祖父　その他

Q.6 調査回答に応じて下さったルートを教えていただけますでしょうか。

こどもサポート教室（きらり、クラ・ゼミ、あいあい、EAC）の案内から

その他の児童発達支援、放課後等デイサービスの利用者の方ではつけんラボの案内から

その他

どうもご協力ありがとうございました。

発達支援研究所ではみなさんの回答を、今後の療育支援の工夫、開発に活かしていきます。